

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2010年11月2日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合) [No.163]

JR内革マル派は党中央と対立し「鉄道会」「JR労研」を結成したと自白！

引き続き、「JR革マル派43名リスト裁判」で原告のJR総連側が2010年6月30日に提出した準備書面について検証を深めたい。革マル派中央とJR内革マル派との対立について、準備書面の内容を紹介する。「No.152」に続き、JR内革マル派と革マル派中央との対立の内容を詳しく自白している部分を検証する。当該の準備書面は以下の通りである。

(3)ア その後も、JRのメンバーと革マル派中央の対立は続き、1997年2月、上野孝や原告大久保孟らの「トラジャ」の一部は、海外に逃亡した。「トラジャ」のメンバーがいなくなったため、1997年4月、JRの組合内に残った革マル派のメンバーらは、原告田岡耕司らを中心に新たに責任体制を作った。

原告田岡らは、革マル派中央と不定期に会合を持った。しかし、革マル派中央とJRのメンバーとの対立は激化するばかりであった。

イ JR内の革マル派のメンバーだった主なものが中心になって、革マル派組織とは独立した「鉄道会」を作り、革マル派とは無関係の学習や運動に取り組んだ。

ウ 1999年1月、「鉄道会」のメンバーは、あらたに「JR労働運動研究会」をつくった。この機関誌の第1号では、この間の、革マル派の運動の総括を行い、革マル派と離れた新しい運動をつくっていくことを謳った。

ここに記載されている大久保孟氏については、「No.151」で詳しく検証した。「JR革マル派43名リスト」の記載の通り、原告JR総連側は、革マル派中央との対立で海外に逃亡していたことを自ら明らかにしている。革マル派常任活動家であった大久保氏には、トラジャとしての活動内容や対立や海外逃亡の実態について詳しく聞いてみたいものである。そして、JRの組合内に残った革マル派メンバーの責任体制の中心を担った田岡氏は、この準備書面の基となった陳述書を書いた本人である(No.133参照)。田岡氏は、1997年4月に作ったJR内革マル派メンバーの責任体制について、そのメンバーを含めて具体的に明らかにすべきである。

JR総連は闇の組織「鉄道会」「JR労研」の実態を明らかにせよ！

準備書面の記載によれば、JR内革マル派は、革マル派組織とは独立した「鉄道会」を作り、さらに、1999年1月に「JR労働運動研究会」を作ったという。この「鉄道会」とは、本情報でも初めて登場する名前であり、どのような組織なのか、まったく不明だ。ぜひ、JR総連には、この機会に詳細に説明して欲しいものだ。

そして、「JR労働運動研究会」とは、「No.9」～「No.12」で詳しく検証した略称「JR労研」のことだ。検証を通じて、JR労研が革マル派活動家の養成源になっている可能性が高いこと、JR労研と革マル派の主張が酷似していること、JR労研がJR総連や構成組織の運動を支配していること、などの危険性を訴えた。JR総連は、JR内革マル派が、革マル派中央との対立を契機に、新たにJR労研を作ったことを自ら明らかにした以上、客観的な検証に基づく重大な疑問に対し、国民が納得できるよう、具体的に説明すべきである。JR総連側が革マル派との無関係を強調するJR労研に対する疑問については、次号であらためて検証することとしたい。